
氷柱

柿原 凜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷柱

【Nコード】

N4965BA

【作者名】

柿原 凜

【あらすじ】

冬のある日の1ページ。

「きれいだ、かわいい、かつこいい、疲れた、あら、やだ、面白い、会いたい、つらい、会いたくない、こわい、さむい、白い、黒い、にがい、優しい、好き、嫌い、そんなことない、そうだね、いてて、あは、なんで、うう、わー、あ、うん、言っ言っ、全部言っ
ていいんだ」

このすべてのワードを余すことなく使うという一種のお題を頂いた

ので書いてみました。

薄紫の空をほんのりと透過させる一本の細長い氷柱。実にきれいだ。

彼女に触れたくてそつと手を伸ばす。じわじわと凍りついていく指が色を変えてゆく。そして氷柱ごしのキス。なんて妄想をしてしまうのは心が汚れている証拠だ。

実際には何もせず、ただただベンチに座って、軒先の屋根から滴り落ちてくるはずの氷柱を眺めているだけ。

だが、隣にいるかわいい彼女とこんな風にゆっくりと雪化粧を楽しめるなんて、なんて幸せなのだろう。

そんなにかつこいい訳でもない俺を好きになってくれた彼女は、俺のはじめての彼女。

地味な片思いの末に実った地味な両思い。でも、昔の派手な恋愛は本当に疲れたと言っていた彼女にはちょうど良かったのかもしれない。

同じ大学の同じサークルで、だいたい行動パターンも似ている俺ら。お互いにどちらが大人しいかという話をするほど非行動派。図書室でばおつしたり、中庭でばおつとしているうちに、いつの間にか惹かれていって、気付いたらこうして真横に彼女がいた。

「あらっ？」

なんて言いながら彼女の肩に乗っていた雪の粒をそつとつまみ捨てる俺。こういう風にきっかけがないと彼女に一切触れられない。生粋の草食系男子である。俺みたいな草食系には一生彼女なんてできるはずないと思っていたが、世の中とは不思議なものだ。

「やだっ」

不意に彼女が悲鳴にも聞こえる声を出す。白くフワフワした地面に、俺ら二人以外の小さな足あとが残っていた。その足あとの先に目線移していくと、輪郭のぼやけた狸が一匹。彼女はきつと足元

を通り抜けていく狸に驚いていたのだと気づき、俺は白い息を吐きながら軽く吹き出した。

「もう、笑い事じゃないよお」

鼻と耳が真つ赤な彼女は、まるで泣いた後のようで、それもまた微笑ましい。手袋で口元を抑えながら俺に寄り添ってくる。

「ほんと、面白い反応するよな」

「面白いって言わないで！」

照れながらうつむく彼女。ちらつく雪が彼女の頬を赤く染めていく。その間、狸は一度だけ俺らの方に振り返って、またどこかへトコトコと行ってしまった。

「またあの狸くんに会いたいなあ」

「どうして？」

ついさっきあんなに驚いていたのに。この何分かの間に何があったというのか。

「だって、あの狸くんがいなかったら、私こうやって肩にもたれることもできなかったもん」

「あ、ああ、なるほどお」

答えが彼女らしくって可愛い。結局、彼女もまた草食系なわけだ。

氷柱のような鋭くつらい風が時々吹いて、その度に俺らは肩をすくめた。

「俺はてつきりもう会いたくないんだと思ってた」

「そんなこわい顔しないでよ。熊が来たんじゃないんだから。狸くんくらいだったら大丈夫だよ」

彼女が肩に頭を乗せたまま苦笑いしたのがわかった。そうじゃない、そうじゃなくって。

「俺と会うのが嫌になったと思ってた」

「えっ」

彼女の表情が一気に真顔に戻った。お互いの間にさむい空気が通り抜けていく。白い肌の彼女がさらに白くなっていく。心の中の黒

いものが徐々に膨らんでいく。本当は口にする予定じゃなかった。もう全て終わりにしてゼロからスタートしようと思っていた。でも、このにがいモヤモヤをずっと貯めこんで過ごすのは俺には無理だった。

数日前から突然メールの返信が遅くなった彼女。たったそれだけだけど、全てがはじめての経験で、何でも不安要素になりうる。数年後、このことを思い出したらきつと笑い話になっているのだろうが、今の俺には想像以上に重くのしかかっていた。

「そんなわけないじゃん。好きだから付き合ってるのに。会いたいからこうして隣にいるのに」

優しい彼女は俺を攻めることなく、丁寧な俺に言い聞かせてくれている。いつもこうして俺が不安になれば彼女は諭すように励ましてくれる。そんなところが、一番好きだった。そうやって他人の心をわかってくれる彼女だからこそ、メールだけでも不安になってしまったのかもしれない。ただ単に嫌いじゃないって言って欲しかっただけなのに、もっと嬉しい言葉をもらった俺は、何をどう言えばいいのかわからなかった。目の前に広がる雪化粧のように、真っ白になっている。

「俺、不安症だからさ、メールの返信、最近やけに遅いなあって。一度思ったら、もうなんかどんどん不安になっちゃってさ。なんか、アホらしいよな。ごめんごめん」

耳たぶがじんとする。凍って固まってしまったような、そんな感覚。さつきまで真顔だった彼女は、失いかけていた微笑みを取り戻していた。

「そんなことないよ。そういう繊細なところ、いいところだと思うよ？ でもごめんね。そんな思いさせてたなんて思ってたかった」

「いや、こちらこそごめん。変なこと言っちゃってさ」

手袋をしていないせいか、指先の感覚がなくなってきた。俺はゆっくりズボンのポケットに両手を入れた。

「氷柱とおんなじだよ」

「えっ？」

彼女が急に目の前にある大きな氷柱を見ながらそう呟いた。

「こんなに鋭い氷柱でも、ちよつと温まれば溶けて先が丸くなるでしょ。もつと温めたら溶けきって無くなる。それと同じ。不安なことが鋭くなつて心を傷つけていくのなら、私がそれを温めてあげる。だからさ、もう何もかも貯めこまないで私に言つてよ。ね？」

なんて人だ。もちろん今まで会った人々の中で一番に好きなのは変わらないが、もつと好きになつてしまひそうだ。いや、どんな好きになつていく。彼女の優しさにいつまでも包まれていたい。そして、俺も同じように彼女を包んで守つてやりたい。広い意味で守つてやりたいと思つたのははじめてだ。大事にしていこうと改めて決意した瞬間だった。

「そうだね。お互いに、ね」

ちらつく雪が、また彼女の真つ赤な頬に舞い落ちてきて、そつと溶けた。

その時、また彼女の悲鳴にも似た声が耳を突き抜けていった。さつきよりもさらに近い距離に彼女のぬくもりがある。漫画みたいに抱きついてくるのはいいけど、ちよつと痛い。決して重たくはないけど、場所が悪かつたみたいだ。

「いてて、今度は何？」

「……狸くん」

彼女が指さす足元を見ると、先ほどの狸がまた戻ってきていた。俺の足元で彼女のようにそう狸。俺はそつと彼女に声をかけた後、狸を静かに逃した。

「あはは、やっぱ会いたくないんじゃないん？」

「なんでそんな事言うの？ さつきせつかく氷柱を溶かせたと思つたのにい。うっう」

「違う違う。今度は狸の話」

「えっ？ あ、ああ、わー、ごめんごめん、勘違いだったよ。ごめんごめん」

彼女はまた照れながら、今度は俺の方を向いて苦笑いしてきた。意外と天然なんだな。そういうところもまた魅力だったりする。

「あのさ、さっきのメールの件、言い訳させてくれる？」

恥ずかしいのか何なのか、彼女は俺から数センチ離れ、少しだけ真剣な感じの表情に変わった。

「あ、うん、言って言って、全部言っていんだから」

「あのね、この前友達に教えてもらったんだけどね、返信の早さを変えると彼が気になってくれるって言うてたから、やってみただけなんだ。なんていうか……もっと私のこと気になってほしいなって思ってたさ！」

語尾を力強く言い放って。彼女はどこかへ走っていった。一人だけ照れ隠しなんてする奴だ。どうしようもなく俺はしゃがみ込んでベンチの下にいるはずの狸を探した。が、その狸もまたすでに去っていた。降り注ぐ雪の結晶が、未だに薄紫の町を白く包み込んでいる。俺は彼女の走った跡が消えないうちに、その足あとをゆっくり辿った。

心の氷柱は、もう溶けきっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4965ba/>

氷柱

2012年1月13日20時46分発行